

地方博物館における情報処理の現状と課題

高見 俊樹
諏訪市教育委員会

近年、地方でも博物館建設件数が増大し、博物館間の競合のなかで館の個性化が迫られている。また市民の生涯学習に対する関心も高まり、全国的に新しい時代にふさわしい博物館への脱却の時期を迎えている。

こうした情勢の下、諏訪市（長野県）では新博物館を建設するにあたり、市民の学習要望や将来予想される博物館ネットワークに、計算機による情報処理によって積極的に対応していくことを計画した。とりわけ、生涯学習のための「学習情報センター」としての役割を果たすことが重要であると認識している。

地方博物館における情報処理は、前例や実績が少なく、手さぐり状態の中で準備を進めているが、この過程で明らかになったいくつかの課題をまとめ、今後の博物館における情報処理やネットワーク構築の在り方について、若干の展望を述べる。

CONDITIONS AND SUBJECTS OF INFORMATION-PROCESSING ON A LOCAL MUSEUM

Toshiki Takami
The Board of Education of Suwa City
1-22-30 Takashima, Suwa City, Nagano Pref. 392, Japan

In recent years, constructions of museum are increasing in number even in the regions. And each museum needs to have its personality to survive under the competition among museums. Besides, people have come to take their interests in lifelong study. Museums suitable for new period are needed nationwide.

Under such situation, information-processing system by using computer is planned on the construction of new city museum in Suwa City (Nagano Pref.). Particularly, we recognize that it is important for the museum to play a role as "Information Center" for lifelong study.

As there are few instances and achievements on information-processing on a local museum, we are groping to search the good way. I describe some problems which we will find out under searching and how information-processing and inter-museum network system should be.

はじめに

今日、全国的に文化施設とりわけ博物館・美術館は一種の建設ブームを迎えている。このことは、好景気などの外的事情もさることながら、市民の文化的要求や学習意欲の増大と無関係ではなく、そうした意味においては歓迎すべき状況であると言えよう。こうしたブームが地方に浸透するに及んで、今後はあるいは「博物館の乱立」といった事態も予想され、建設運営主体の側としては他館との違いを明確にするような「地方博物館の個性化」を追及する必要が生じている。このことは、博物館の今日的な在り方を再検討する時期が到来したことをも示していると考えられる。

一方、「地方の時代・文化の時代」はすでに定着し、今まさに「生涯学習の時代」へと市民の関心も移り変わりつつあることも見逃せない。これに伴って、地方の博物館にも、これまでの「展示施設」主体の体質から「市民のための学習施設」への脱皮が迫られている。多くの場合、生涯学習施設としての博物館に求められているのは、特に各種学習情報のセンターとしての役割であろう。

こうした二つの大きな情勢変化の中で、博物館が時代に即して変わっていくために画期的な効果を及ぼす方法と認識されつつあるのが「計算機による情報処理」であろう。コンピュータ時代の今日、これはごく自然な選択であるが、博物館における計算機利用の在り方や導入にあたっての問題点はまだ十分には検討されておらず、ＯＡ機器やＣＧなど見かけが派手なだけに、ややもすると一種の「上滑り」に陥る危険性も否定できない。

諏訪市は人口約５万人の地方の小都市であるが、現在、１９９０年秋の開館を目指して歴史・民俗系の博物館を建設中である。新築の博物館においては、先に述べたような全国的状況を強く認識し、なんらかの形態による情報処理事業を行いたいとの計画を持っている。運用が開始され一定の成果をおさめたシステムでもなく、成功事例ともいえないものであるが、これからの地方博物館における情報処理を効率的に設計・運営するために、一事例として、現在までの計画具体化の過程で明らかになりつつある問題点をいくつか指摘しておきたい。

生涯学習時代の博物館と情報処理

生涯学習のための施設や制度の充実は、最近各地で具体的に実践されつつある。通例第一段階としては、生涯学習基本構想計画の策定など従来の「社会教育」の再編が行われ、続いて施設整備に着手することが多い。「生涯学習センター」などを新たに開設する場合を除くと、既設のまたは新築計画のある「社会教育施設」（公民館・図書館・博物館）などの一部にセンター的な機能を併せ持たせるのが一般的である。これら生涯学習の中核と位置づけられる施設では、生涯学習全般の指導にあたりとともに、学習情報を一元的に管理し、施設と情報の利用を促進することを主目的としている。なかでも博物館がセンターになる場合は、「学習情報センター」的な役割が前面に出てくることが多い。これは、圏域の文化財情報の蓄積に実績があること、物を扱う施設であって目に見える形での学習効果がアピールすることなど、博物館が本来的に持っている特色をそのまま引き継いでいるためである。

一方、博物館そのものに対する市民要望も変化してきている。展示施設としての博物館に対しても、ありきたりの展示に飽き足らず、個性的・動的なディスプレイが歓迎される傾向にある。また運営面においても、館独自の事業活動に対する関心が一般市民の間にも高まっている。これは、博物館的な施設が増え、また博覧会ブームなどによって観覧者の目がこえてきていることなどにもよるが、そうした表装的な興味だけでなく、むしろ学習意欲の深化に伴う要望の多様化の表われと理解したい。

「博物館は古い物を陳列してあるところ、一度行けば二度は行く必要はない、博物館に通っているのは特別勉強をしたい人達だけ」といった古典的な博物館観はすでに過去のものになりつつある。とかく「資料館」的になりやすい地方博物館も今や脱皮の時期を迎えているのである。

こうした全国的な博物館の転機ともいえるべき時期に、諏訪市では従来からあった博物館建設計画が具体化し、1990年度開館を目標に建設事業が開始された。時代の要請に応え、従来のイメージを脱却した、真に情報化時代に相応しい新しい博物館を建設するという構想のもとに、コンピュータ導入による情報処理業務を中心として、積極的に生涯学習のための「学習情報センター」の役割を果たすことが計画された。情報化の波は全国的かつ急激なものであって、近い将来において、国の機関などの主導による博物館ネットワークや文化財情報ネットワークが開始されるであろうことは十分予測できる。しかし建設側の事情としては、国によるサービス開始を待つことはできないため、国のネットワークに参加するための受け皿となるべき最小限の機能を具えるとともに、これとは別に、地域に密着した独自の情報処理とその利用の道を探ってみたいと考えたのである。

社会教育施設における「計算機による情報処理」は、「図書館」が先行している。図書館では、メーカー間の差異などが存在するものの、業務内容が極めて計算機向きであることから、すでに管理運営システムが市販され実績をあげている。ある程度全国的な標準化も進みつつある。これに対し博物館の場合は、一部の国立や大都市の館においてかなり高度な情報処理が開始されてはいるが、収藏品管理システムやネットワーク化を見越した記録方式の標準化などは、ほとんど進んでいない。国立博物館のシステム等は確かに完成度が高く魅力的なものであるが、これらはハードもソフトもあまりにも大規模なもので、残念ながら簡単に地方の博物館には移植できそうにないし、仮にそっくり借用できたところでこれを運営することは不可能である。また情報処理の目的も必ずしも一致していない。したがって、地方の博物館で利用できるような小規模のシステム、あるいは仕様が決定されるまでは、どうしても自前でシステム・ソフトを用意しなければならないことになり、これだけでも財政規模の小さい自治体にとってはかなり負担となる。こうした状況下で、当市における計画推進にあたっては、「なるべく安く、簡単に扱えて、効果の上がる」システムを模索せざるを得なかったが、それにしてもある程度の出費は避けられないところである。しかし、これからの時代に本当に必要な在り方は「標準化」と「個性化」の両輪による運営であると考えている。そうした意味においてはむしろ、独自のシステム・独自の処理業務内容を持つことは望ましいことでもある。独自の情報処理によって活発に活動する、複数の地方博物館を結ぶネットワークを実現することが、「地方の時代」を達成しつつある現代に最も相応しい博物館ネットワークの在り方と考えられる。上からの情報の流れをキャッチし、多様な情報を整理して利用者に手渡すことはもちろん大切だが、それだけでは地方博物館の使命は果たせないし、全体の活性化も図れないのである。

また、全国の地方博物館がこれまでに培ってきた良き伝統を、新しい方法である情報処理においても発展的に継承してゆくべきである。地方博物館はそのフットワークの軽さから、比較的「外に向かって開かれた」施設であった。収藏品や地域に関する情報について、その整理は必ずしも十分でなくとも、誰に対してもオープンに提供されてきた。そうした意味においては、「市民」「外来観覧者」「地域研究者」「中央研究者」の共同利用機関としては、あるいは大規模館よりも機能していたとさえ言えるであろう。こうした長所を新しい方法によってさらに拡充することは、きわめて意義深いことである。以上、博物館へのコンピュータ導入にあたっての基本的な目標について整理した。

（仮称）諏訪市博物館における情報処理の計画

現在建設が進められている（仮称）諏訪市博物館では、おおよそ次の様な内容の情報処理を行う計画である。この計画は1988年度から順次準備されたものではあるが、建設年度を迎えた今日、後述するように様々な制約、とりわけ財政的な事情によって、必ずしもすべてが開館時に実現可能とはなっていない点を予め明らかにしておきたい。また、計画の策定および現在進めている準備段階の作業にあたっては、一貫して国立教育研究所教育情報センター教育内容情報研究室の及川昭文室長の指導を受けている。一般に地方の中小の自治体においては、いかなる事業においても、第一線の研究者の指導を常時受けるようなことは比較的困難であって、なかなか質の高い事業が実施できないのが実状である。今回の計画については、幸いにも及川室長の全面協力を得ることができたために、具体的に推進することができたものである点を特記しておく必要がある。

（1）経過と現状

博物館において求められる情報処理業務は、「展示・収蔵品の管理」と「利用者への情報提供」とに大別できる。これらをどの程度の規模で、どんな内容によって行うかによって業務の性格が決まり、さらに財政事情・時間・運営にあたる担当者等に関する条件が加わることによって具体的なシステムの形態が決定される。当初の段階においては、万全な資料管理と、あらゆるニーズに応えられるような幾種類ものデータベースの構築を目指し、汎用のコンピュータを中心とした大規模システムを想定してみたが、地方博物館においてはこうした大システムを独自に所有することが困難であるばかりか、必ずしも予算に見合うだけの効果は期待できないことが判明し方向を転換した。つぎの段階では、地方の小施設の特色を活かした、地域に密着した個性的なデータベースを作ること、これを市民や研究者が気軽に利用できるような環境を準備すること、館の運営と管理に効率的にあたるための最小限の管理システムを作ること目標とした。及川室長の指導によって大まかにシステムを想定し、一部データの準備を開始した。また、博物館の建設および展示の構想も具体化したため、これらと共に予算的検討がなされ、情報処理業務に対しても、十分とは言えないまでもある程度の財政的裏付けが用意できたかに見えた。ところがこの時期において、全国的な建設ブームによる人手不足から建設費が高騰し、この結果予算配分が変更されるに及んで、計画は縮小を余儀なくされた。したがって設計方針・ハード機器・データ記憶方式もより安価なものへと再考され、システム全体も段階的に整備してゆくこととなった。

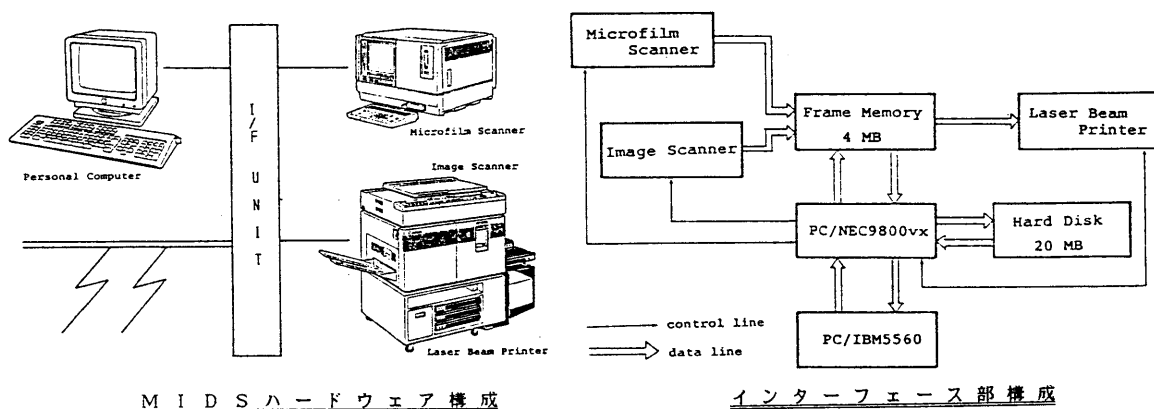
現在、開館時を業務の第一段階と考え、以下の各システムに優先順位をつけてデータ入力準備を行っているが、将来的課題とせざるを得ない部分が多いのほかに多くなってしまったのが実情である。

（2）展示・収蔵品管理システム

博物館が所有している「物」や「情報」を目的的に整理することが基礎的な作業である。扱う資料は、民俗・考古・歴史・自然など分野が多岐に渡り、形態・属性が様々である。また、オリジナル以外の資料（写真・テープ等）も多い。資料についてはその形態にかかわらず同じデータベース上で同格に扱うのが便利であろう。そのための、データ項目・検索項目を確定するため検討を続けているが、使用機器やソフトの組み方は未定である。他館との情報交換も想定し、できるだけ普遍的な項目を選ぶ必要を感じている。また既に持っているデータの効率的活用を目指している。なお、考古資料のうち「遺跡情報」およびこれに関する「文献情報」については、国立教育研究所を中心とするグループによって、全国的なデータベース（ASDB）構築が提唱され、既にデータ項目と項目辞書が示されているのでこれに準じてデータシートを作成済である。

(3) MIDSによる古文書・図画管理システム

MIDS (Microfilm-based Image Database System) は及川室長を中心に開発された、モノクロのイメージデータとこれに関する検索項目を管理するシステムで、考古資料における「原図」や「古文書」など、オリジナルの保存とその白黒画像の検索・参照が必要とされる資料の管理に適している。パソコンとマイクロフィルムの利用によって安価にイメージデータを扱うことができる点で、地方博物館にとっては即戦力として期待できるシステムと言えよう。諏訪市には「諏訪市史」編纂の過程で收集整理された多くの古文書データがあり、これらをMIDSによって管理しその有効性を確認したいと考えている。



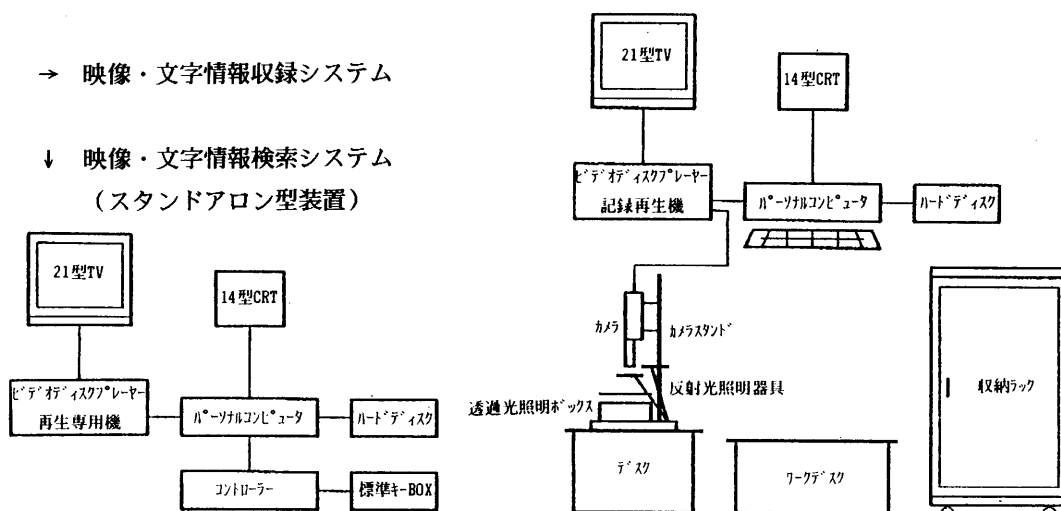
第1図 MIDS構成図(及川 1987)

(4) 館内情報提供システム

第一段階として、館内において来館者が簡単に利用できるデータベースを考えている。展示資料や収蔵資料に関する情報や地域の文化財や各種学習情報などを、簡単な文字情報と自然画像によって提供するシステム(諏訪百科事典)で、文字はパソコン、画像はLDプレーヤーから出力する予定である。これより一ランク上位に、文字情報を主体としたより詳しいデータベースを置き、館内提供のほかにパソコン通信やファックスによる館外提供(学校等を含む)を準備している。情報源として、市所有資料のほかに、出版社がある事典を刊行する際に使用したワープロ編集データを、試験的に借用している。

→ 映像・文字情報収録システム

↓ 映像・文字情報検索システム (スタンドアロン型装置)



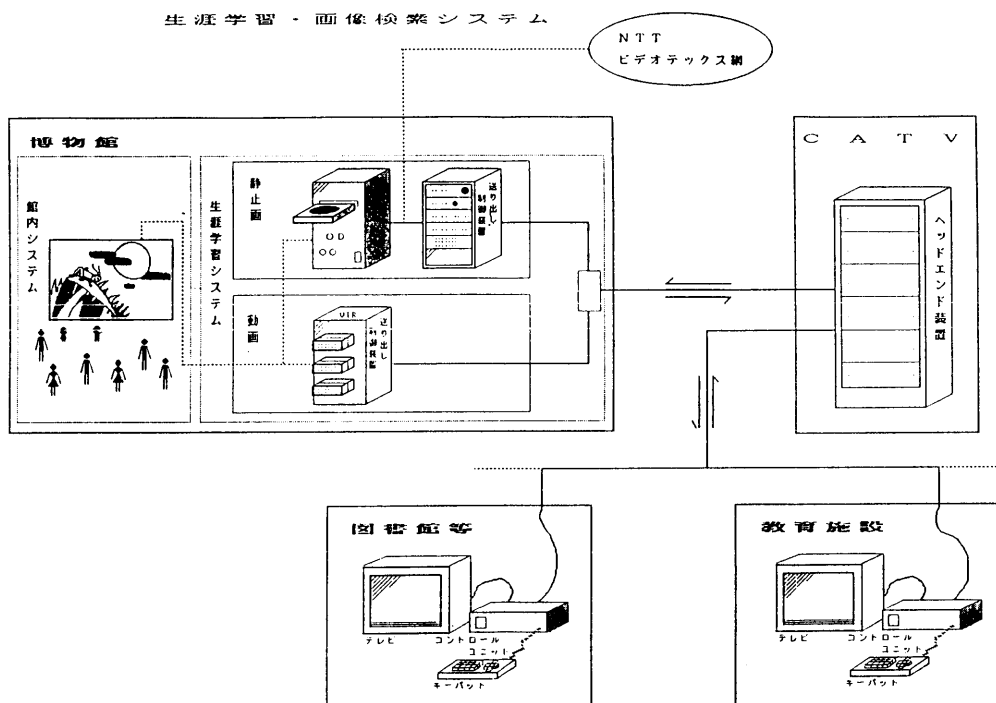
第2図 館内情報提供システム案

(5) 市内情報ネットワークおよび館外情報提供システム

館外への情報提供として、上記のパソコン通信・ファックスサービスのほかに、とりあえずは公共施設、ゆくゆくは各家庭を対象とするシステムを計画している。諏訪地方はCATV（有線テレビ）への加入率が高く、CATV側も早々に幹線に双方向の光ケーブルを設置済であるので、専用のチャンネルを利用して、画像情報を個々の端末のリクエストに応じて提供することができるシステムが可能である。将来の行政情報提供（テレビ広報など）も視野にいれながら準備を進めている。

(6) 全国博物館ネットワーク・文化財情報ネットワークへの参加

国・県レベルでの準備が整い次第、積極的に参加してゆく予定である。



第3図 館外情報提供システム案

まとめ 一 提言にかえて一

これまでの準備の経過のなかで明らかになった主な問題点を整理し、今後の博物館における情報処理や、国の機関を中心に準備されるであろうネットワークの在り方についての提言にかえたい。

最大の課題は言うまでもなく財政的事情による限界である。現状では計算機およびシステム導入にはかなりの財政負担が必要であり、小地方自治体には厳しい状況である。また、この分野に対する内部的理解もまだ浅く、優先的に予算を獲得するのは容易でない。国による補助制度の充実や、複数の団体によるシステム共同開発の実現が望まれる。同時に、投入された予算や時間を無駄にしないため、一刻も早く基本的システムや仕様の標準化が必要である。これによって国による指導も実効的なものとなろう。

ネットワークの構築にあたっては、様々な学習要望を持つ来館者が実際に使用する場面を想定した設計によって、生涯学習時代に相応しい、身近で使いやすい情報システムを実現したいものである。

以上、諏訪市の場合を例として、地方博物館における情報処理の在り方について話題を提供した。情報化時代における地方博物館の活性化と、より有効なシステム構築のための一助となれば幸いである。